

(昭和54年解体、一部中央公園内に復元)



旧宇都宮商工会議所

「この建物は、大正11年、宇都宮商工会議所創立30周年記念事業として決議され(中略)大谷石貼りの2階建てとなった」(写真と文:NPO法人大谷石研究会「大谷石百選」より)



日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会

宇都宮市桜2-3-27

「聖堂は鉄筋コンクリート造で、外壁に大谷石を貼付け、方形の窓を穿って、ステンドグラスを嵌んでいる」(文:NPO法人大谷石研究会「大谷石百選」より)

カトリック松が峰教会

宇都宮市松が峰1-1-5



「大谷石を用いたキリスト教会で、双塔をもち、ロマネスク様式でつくられた貴重な近代建築である」(写真と文:NPO法人大谷石研究会「大谷石百選」より)

特集1:大谷石と石蔵

歴史と伝統の 大谷石が創る 新しい「宇都宮」 残された石蔵を活用して 楽しいまちづくり

宇都宮で暮らしている私たちにとって、大谷石はごく身近な存在です。ふだんは気にしていなくても、少し注意してあたりを見回せば、建物や塀、外壁、内装、そして小物類…たくさんの大谷石に出会うことでしょう。私たち宇都宮市民の生活に、しっかりと根を下ろしている大谷石。その魅力をまちづくりに活用する活動をご紹介します。

まちのあちこちに残る 大谷石蔵

宇都宮の風景に欠かせないのが、大谷石です。塀や蔵など、さまざまな建造物に使われ、近年では装飾用素材として室内の壁材としても注目されています。「大谷石」というと、すぐに連想するのが、旧帝国ホテル。アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが使ったことで、全国的に名前が知られるきっかけになりました。実は、近年また県外でも大谷石が見直されてきています。構造材ではなく、仕上げ材としての利用が主流ですが、多

くの建築物に取り入れられています。東京スカイツリーのエントランスにも使われて、好評です」

こう話すのは、建築家で、宇都宮まちづくり推進機構の歴史的建物活用特別委員会(以下「特別委員会」)委員長でもある、武井貴志さん(株)ティクス設計事務所社長)。ジャズ好きで、宇都宮市民ジャズオーケストラの代表を務めるなど、宇都宮のまちづくりになくてはならない人のひとりです。

宇都宮まちづくり推進機構や特別委員会では、平成15年から定期的に、宇都宮市の中心市街地にある大谷石蔵を

の情報提供や啓蒙活動を行いました。こんなにくさんあるのに、一般市民の認知度が、まだまだ低い。なんとかしなくちゃ、というのが関係したみんなの気持ちでしたね」

当初の中心市街地での調査では100件ほどの石蔵が確認されていましたが、その後何度か調査を重ねる間に、新しく発見されたものもある一方で、道路拡張や所有者の事情などにより失われた石蔵も、いくつも確認されました。平成22年度の調査では、中心市街地に98件の石蔵を確認できましたが、これは前回調査と比較すると19件減少しています。

「蔵に限らず、古い建造物は、放っておくとどんどん失われてし

大谷石とは

大谷石は、軽石凝灰岩と呼ばれる石の一種です。大谷町一帯で採掘されるので、この名前がついています。

その利用は古く、古墳時代の石室での使用例があるほどです。けれども、当時はほとんどは下野国周辺での利用に限られていました。

その後、江戸時代を迎えた頃から、徐々に利用は拡大し、広く流通するようになります。当時は鬼怒川などの河川を利用しての運搬が主で、遠くは江戸まで運ばれる事もあったようです。

ただ、文献資料によれば、江戸時代の石工は50人程度で、小規模な採掘にとどまっていたようです。大規模な生産が行なわれるのは、明治時代になってからで、それを機に宇都宮でも石積み用の石蔵が建てられるようになりました。

参考資料:「大谷石百選」NPO法人大谷石研究会、「大谷採石場 不思議な地下空間」小泉隆著



昔の大谷石採掘現場の様子(「石井敬夫コレクション」より)

U t s u n o m i y a x O h y a - I s h i

調査する活動を続けています。「もともとは、栃木県建築士会宇都宮支部で、平成13年に市内の調査を行いました。私の前の特別委員会委員長だった塩田潔さんなどが中心になり「大谷石を使った建造物は大切な文化資産だから、後世に残さなくては」という気持ちで調査を行ったところ、まだそれなりの数の石蔵が残っていることが分かりました。

その後、まちづくり推進機構が発足したので、調査結果を元にしたマップなどを作ってもらい、市民へ



特定非営利活動法人
宇都宮まちづくり推進機構
歴史的建物活用特別委員会
委員長
武井 貴志さん
(株)ティクス設計事務所社長)

まいります。それは、私たちが親しんできた(宇都宮の風景)が失われていくことを意味します」武井さんは、残念そうに言葉を続けます。「だからといって、所有者に「残してください」とお願いしても、その方々にはその方々なりの事情もありますし、また再開発や道路拡張といった公の理由での取り壊しもある。ですから塩田委員長(当時)を中心に、メンバーで知恵を絞り、いくつかの方向性を打ち出して行ったのです」

単なる調査だけではなく、いかにして活用するか、保存して行くか、一歩踏み込んだ活動をスタートすることになりました。

そもそも、大谷石の魅力とは、どのようなものでしょうか? 武井さんは、建築家の立場から、こう説明します。

「大谷石は」存知のとおり、柔らかい石材です。それが加工しやすさにつながっているのですが、同時に手触りの良さ、暖かみを醸し出しています。今風に言えば(癒し系)の素材なんです。また、臭いや湿度を吸ってくれる性質もあり、それが空間の環境を一定に保つ役割も果たしてくれています」

では景観との関わりでは、どんな点に魅力があるのでしょうか?

「日本には、石を積んで建物を建てる文化は、あまりないんです。もちろん城の石垣などはたくさんありますが、一般の建物としては、主流は木造です。ところが宇都宮や鹿沼など大谷石産地周辺には、たくさん石積みの建

柔らかい
(癒し)に人気



テイクス設計事務所

事務所 / 宇都宮市築瀬町1834-6



私の事務所です。もともとの発想は、石を積んで作った外壁にツタを這わせたい、というものでした。大谷石を使用する事で、これからの宇都宮の景観に対する提案になれば、とも考えました。(武井さん)



カフェギャラリー 柚

飲食店、ギャラリー / 宇都宮市一番町2-17



中に入ると、基礎の部分に大谷石が積まれていて、その上に木の建物が乗っています。また当時の柱がそのまま使われています。(武井さん)

復権・再評価という近年の動向にながっていることは、言うまでもありません。宇都宮のまちづくりは、今後さまざまな取り組みが行なわれ、10年20年と経つうちに大きく変わるのかも知れません。その中で、歴史や伝統、文化などを内に秘めた存在としての「大谷石蔵」も、きっと重要な役割を果たすことでしょう。

大谷石の復権が新たな景観に

「私たち特別委員会だけでなく、例えば最初に調査を始めた栃木県建築士

あるかどうかなどを、調べました。予想していたより皆さん慎重な意見が多かったため、さてどうやってマッチングを進めたものか、これから知恵を出し合うていくつもりです」
利用の仕方も、店舗や事務所、ギャラリー、イベントスペースなど、さまざまな形態が考えられます。現在は倉庫としての利用が大半ですが、マッチングを行なうことで、思わぬアイデアが出てくるかも知れません。そういった積み重ねにより、宇都宮のまちなみが少しずつ変わり、今よりもっとよい（ふるさと）が実現するのではないのでしょうか。

U t s u n o m i y a x O h y a - I s h i

会や、NPO法人の大谷石研究会など、いろんな団体が大谷石の魅力を感じ取り、より積極的な活用を模索・提案しています。みんな、一生懸命やっていますよ」
うれしそうに話す、武井さん。
平成13年に発足した大谷石研究会は、大谷石蔵だけでなく、大谷地区の景観保存や観光など、広範囲な活動を行なっている団体です。平成18年には「大谷石百選」という本も出版しています。県内外の大谷石建造物を写真と文章で紹介したもので、大谷石建造物を網羅した資料としても貴重です。今回の特集でも、同書から写真をお借りして掲載しています。
こうした動きが、それぞれ独立して行なわれているだけでなく、同時に連携も保ちつつ、大谷石全体の

比較的小さい蔵を、上手に飲食店に活用されています。このくらいのサイズの蔵が宇都宮には多いので、とても参考になります。(武井さん)



ムナカタ

飲食店 / 宇都宮市伝馬町2-6



造物が残っていて、それが独自の景観を構成しています。これは大変珍しいし、宇都宮独自の文化と言っても過言ではないと思います」
武井さんによれば、大谷石蔵が盛んに作られるようになったのは、明治以降のこと。それまでは石塔や石塀などに使われる事がほとんどだったようです。また、蔵で使用する場合も板状にしたものを貼る使い方がほとんどでした。
明治以降、現在残っているような石積み蔵が、盛んに作られるようになりました。「一時期は、大谷石の蔵を持つていることが、ステータスだったようですね」(武

井さん) こうしてできた、宇都宮の「大谷石蔵文化」ですが、残念ながら高度成長期以降徐々に失われつつあります。その一方で、大谷石に注目する人も増えつつあります。武井さんの言う「癒し系」効果も関係しているのでしょうか。大谷石蔵を店舗に活用したり、内外装に使用したりするケースが、徐々に増えつつあるようです。「石蔵」は「おしゃれ」というイメージも共有されるようになり、市民の中にコンセンサスも得られやすい状況ができてきているのではないのでしょうか。

持ち主と借り手のマッチング

まちづくり推進機構や特別委員会では、以前より「石蔵を活用して、宇都宮の活性化を」との考えから、さまざまな（仕掛け）（働きかけ）を行ってきています。
松が峰教会前の旧公益質屋活用事業として、昨年オープンしたレストラン「おしゃらく」も、その一つです。
また、東武宇都宮線南宇都宮駅付近の大谷石蔵群が、ギャラリーやレストラン、ダンススタジオ、事務所などに再利用され、多くの人が訪れています。「いま特別委員会で力を入れているのが、マッチング事業です。蔵を所有して



大谷石の採掘と輸送

大谷石は、昔はほとんどが露天掘りで採掘されていましたが、やがて坑内掘りが主流になりました。昭和30年代に機械が導入されるまで、作業はほとんどが手掘りだったといえます。機械（チェーンソー）は5年ほどでほぼすべての採掘場で導入され、採掘の効率が飛躍的に向上しました。そのおかげで、間もなく訪れる高度成長期のニーズに対応できたのでしょう。
輸送は、江戸時代までは馬や水路（筏）が主流でしたが、その後明治30年には人車軌道が設置され、大正4年には軽便鉄道も開通しました。昭和3年には軌道が廃止となり、昭和39年には軽便鉄道も廃止。その後はトラック輸送が主になりました。60歳以上の方であれば、軽便鉄道の記憶を持っておられるかも知れません。
参考資料：「大谷石百選」NPO法人大谷石研究会、「大谷採石場 不思議な地下空間」小泉隆著

「築70年を超える大谷石造りの石蔵で（中略）松が峰教会の正面に位置し、中心商店街にも隣接していることから、大谷石蔵が失われつつある中心市街地にあつては、大変貴重な建築物である」(写真と文：宇都宮まちづくり推進機構資料より)

おしゃらく(旧公益質屋)

飲食店 / 宇都宮市宮園町8-9



これだけ大きな石蔵がまとまって見られるのは、他にあまりありません。ギャラリーやバレエ教室、ダンススタジオ、飲食店など、さまざまな店舗が集合しているのも魅力です。(武井さん)



南宇都宮の石蔵群

写真はクラシカルパレエ宇都宮、be off

